

「日々の理科」(第 2784 号) 2022, -3, 20

「雪とつららの探究 (3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

山荘に庭には、かなり大きな屋根付きの駐車場がある。大型車やキャンピングカーも 2 台止められる大きさだ。以前伐採したカラマツの幹を使って、大工さんに造ってもらったものだ。特に雪の多い時期は、車をすぐに発進できるので、とても有難い。



ガレージの屋根は強い「波板」なのがだ、傾斜が緩いので、積もった雪はそのまま残る。昼には気温が上がって雪が融けるので、それが夜間に少しずつ凍って「つらら」になる。



冬の北極圏のように、日中も氷点下数十度という地域では、積もった雪が全く融けないので、実はつららはできない。そもそも、真冬の北極圏では「日中」といっても、太陽は昇らない。昼夜に気温差のある地域・季節のほうがつららは形成されやすいのだ。



特に「波板」の屋根の場合、軒につららができやすい。波板の凹んだ部分から融けた水が滴下しやすく、そこに集中して再結晶するからだ。うまくすると、全部の凹部につららがズラリと並ぶこともある。



つららの基部はものすごく細く、長さ 50cm ほどに成長したつららでも、基部の直径は 1cm ほどしかない。「折る」というよりも、指で「触れた」だけで、簡単に採取できた。



先端は恐ろしく細い。子どもの頃、雑誌に「凶器のみつからない殺人事件」というのが載っていた。その凶器の正体が「つらら」だったというストーリーだ。あり得るかも知れないと納得した。